

平成17～18年度

今、思春期の子供たちは  
どのように生きているのか

—意識調査からとらえた実態—

平成19年3月

東京都教育相談センター

## はじめに

東京都教育相談センター  
所長 関口 栄一

「今、子供たちはどのように生きているのか」を全ての大人が真剣にとらえ、考えなければならないときが来ています。

東京都教育相談センターでは、児童・生徒の事件・事故後の心のケアとして学校への緊急支援を行っています。その中で、事件・事故にかかわっている子供たちの心性に、生きていることへの無力感、あるいは強い葛藤が感じられます。

また、当センターでの相談において、生きにくさを感じ、悩みや不安を強く感じている子供たちに出会います。

その背景には、少子化、核家族化、さらに高度情報化などがあり、人とのかかわりが少ない中で子供が成長していかざるを得ないことと無関係ではないように思われます。

しかし、子供たちが自らの悩みや不安を乗り越え、自立した社会人となることは、全ての大人の願いであり、責任であると考えます。

このような状況を踏まえ、当センターでは、平成17、18年度の2年間に渡って、「思春期の心理と行動に関する意識調査」を実施し、思春期の子供たちが、どのような思いで毎日を過ごしているのか、困ったり、悩んだりしたときにどのように乗り越えているのかを探究し、その一端を本研究報告書にまとめました。

最後に、調査の実施に御協力をいただきました中学校・高等学校生徒の皆さん、学校関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

また、研究過程において、適切な御助言をいただいた高塚雄介明星大学教授に感謝申し上げます。

本研究で得られた知見を教師、保護者、子供にかかわる全ての方々に参考にしていただき、子供たちの健やかな成長のために役立てていただければ幸いです。

# も く じ

はじめに	
〔要約〕	1
I 研究の背景	2
II 研究の目的と方法	2
1 目的	
2 研究の方法 — 意識調査の作成と実施 —	3
(1) 予備調査	
① 設問Ⅰ「思春期の心理」	
② 設問Ⅱ「対処方法」	
③ 予備調査の実施	
④ 調査項目の精査と本調査項目の決定	
(2) 本調査	6
① 本調査の実施	
② 有効データの作成	
III 意識調査の結果と考察	8
1 「思春期の心理」の分析	
(1) 因子分析の結果	
(2) 因子の様相	10
2 「対処方法」の分析	14
(1) 全体傾向	
(2) 学年別傾向	16
(3) 性別にみられる傾向	18
3 「思春期の心理」と「対処方法」の関連	20
(1) 対処方法からみた思春期の心理	
(2) 特徴的な対処方法	23
4 調査からみた気がかりな子供たち	26
(1) 気がかり群の設定	
(2) 気がかり群の子供たちの様相	27
IV まとめと今後の課題	32
引用・参考文献	35
〔巻末資料〕 資料1 予備調査用紙	37
資料2 本調査用紙	41

# 「今、思春期の子供たちはどのように生きているのか」

— 意識調査からとらえた実態 —

## 〔要約〕

本研究は、思春期の子供たちの生に関する心理をとらえるために、「思春期の心理と行動に関する意識調査」を都内公立中学・高校生 3,494 名を対象に実施し、分析・検討したものである。この調査は「思春期の心理」と「対処方法」から成っている。

- 1 「思春期の心理」においては、因子分析を施し、「不安・抑うつ感」「家族親和感」「自己肯定感」「攻撃性」「友だち友好感」「自暴自棄感」の6因子を抽出した。全体傾向としては、思春期の子供たちの「不安・抑うつ感」は高く、「自己肯定感」は低い。「自暴自棄感」は低く、「攻撃性」は正規分布を示す。「家族親和感」は高く、「友だち友好感」も高い。
- 2 心配事や悩み事があったときに取る対処方法を「解決行動」「攻撃行動」「自己統制」「発散行動」「心理状況」に分類してとらえた。大方の子供は解決行動として自分でどうすればよいかを考えるが、一方でおしゃべりをしたり、趣味に打ち込んだりして発散する。また、半数の子供は誰かに相談するという解決行動をとるが、半数の子供はがまんし、仕方がないとあきらめ、自己統制する。さらに、3割の子供は体調をくずし、2割の子供が危惧される対処方法をとる。
- 3 「不安・抑うつ感」、「自暴自棄感」が高く、「家族親和感」、「友だち友好感」が低く、対人関係によって支えられていない子供を「気がかり群」と命名し、分析した。このような子供たちは、悩み事や心配事を抱えると、何もできなくなり、発散行動や解決行動にうまくつなげられず、「自分の部屋にこもる」、「自分を傷つける」など、危惧される対処行動に向かう場合があると考えられる。